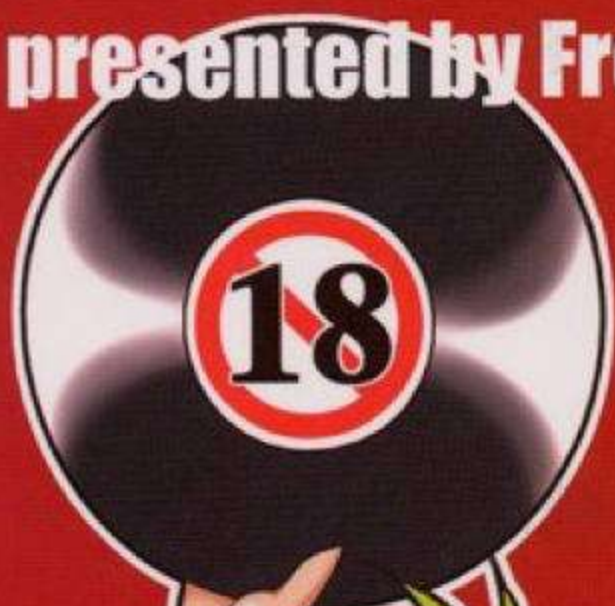
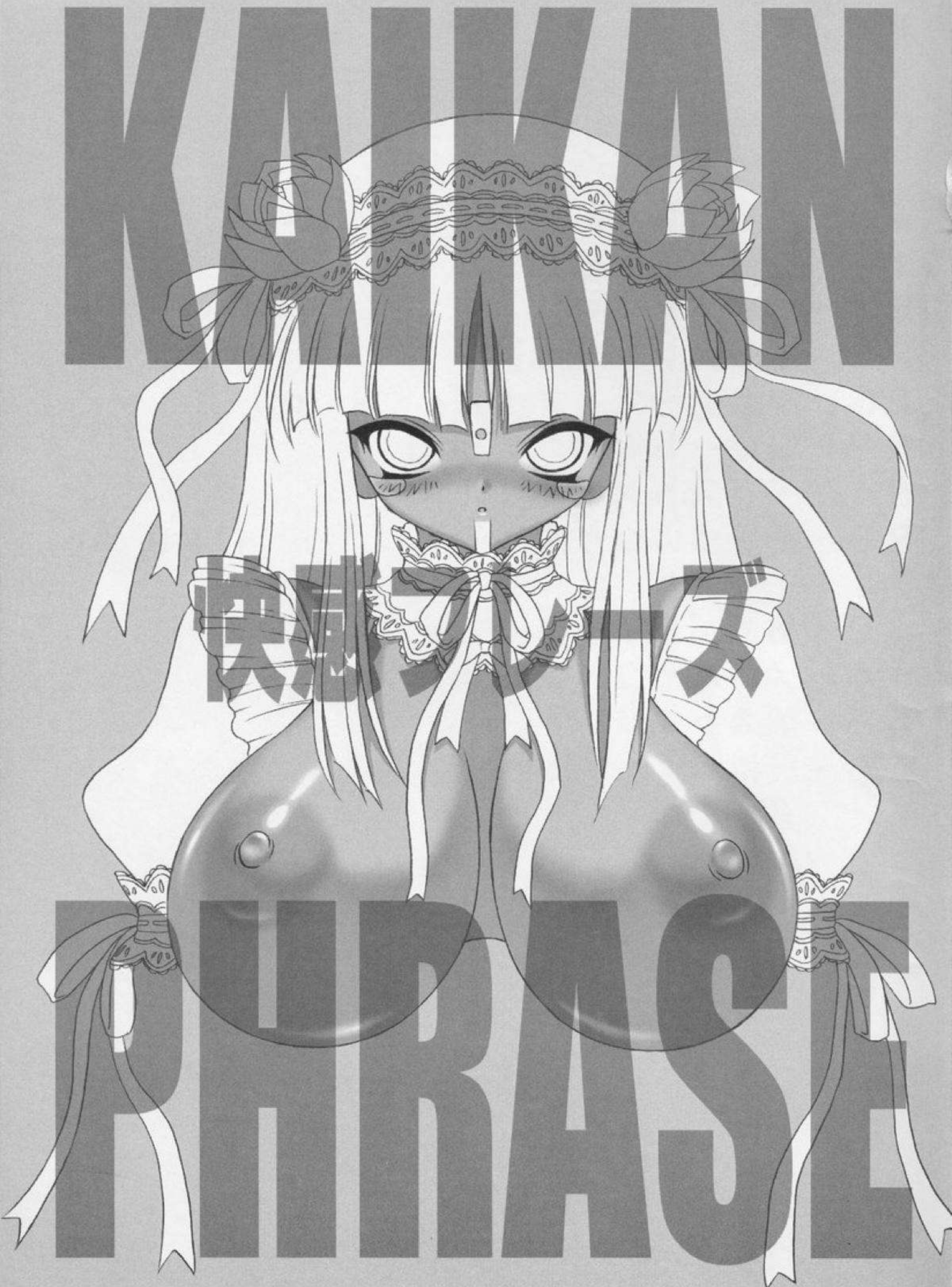


KAIKAN 快感フレーズ PHRASE

for beatmania IIDX fans
adults only
presented by Freaks

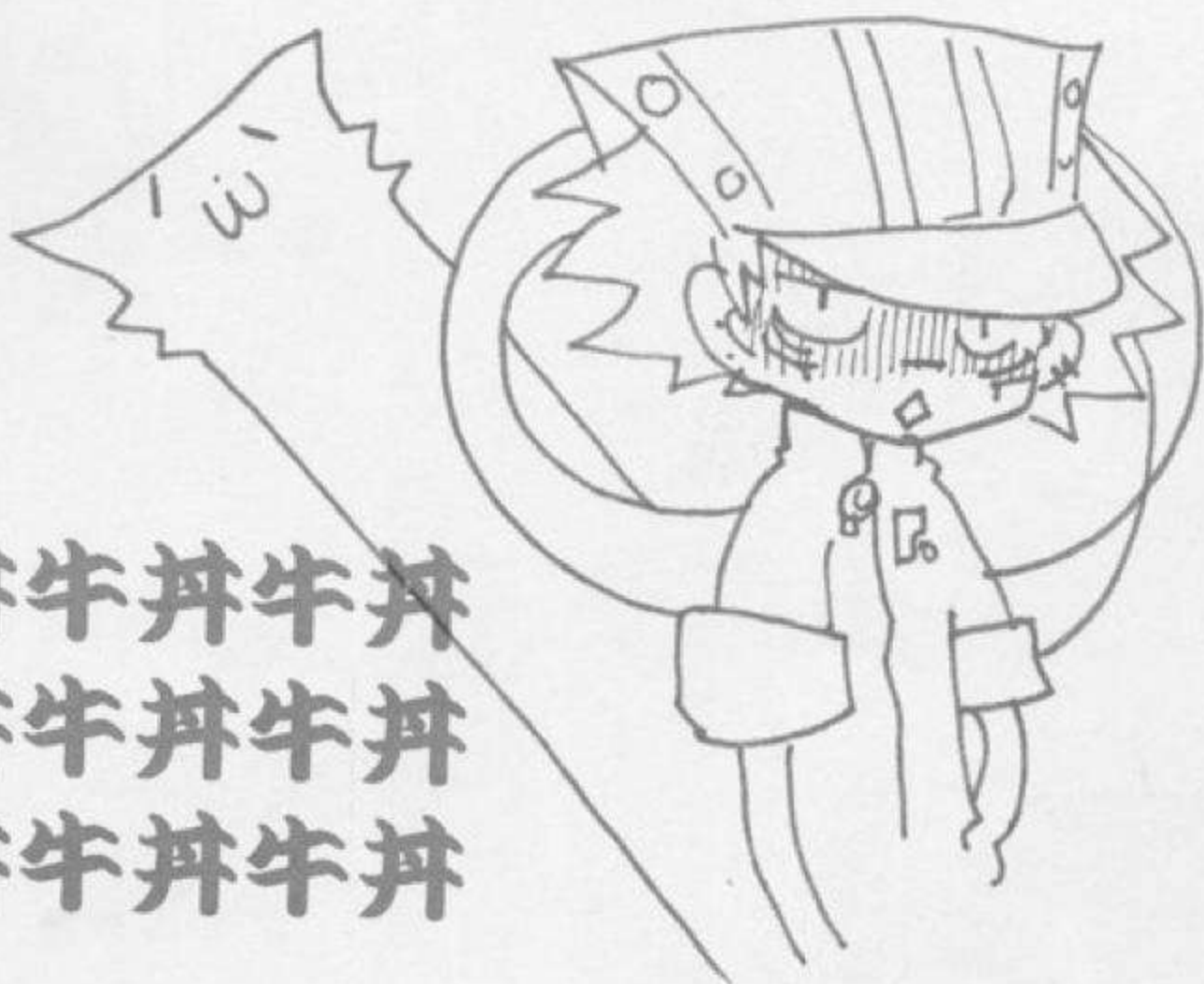




もくじ

- 05～快感レッスン オノメシン
15～イラスト 七麻皐月
16～イラスト オノメシン
17～じっとちゃん SUMY
21～イラスト 夕月
22～イラスト オノメシン
23～シスターズ・プリティ 猫 (みけ)
33～フリートーク 猫 (みけ)
34～イラスト オノメシン
35～勝負はいつもくだらない OYZ 挿し絵猫 (みけ)
41～イラスト 猫 (みけ)
42～あとがきふゆかひまんが オノメシン
44～メンバーコメント
45～ゲストコメント
46～奥付

牛丼牛丼牛丼牛丼
牛丼牛丼牛丼牛丼
牛丼牛丼牛丼牛丼





リリース！お前も
もう17歳だな

レディのたしなみを
覚えねばならん年頃だ

というわけで

助手2号

助手1号

今日はお前に
夜のいとなみの
レッスンだ！

お兄様
これは……？

あっ……
びん……

それでは
レッスン開始！

ロウ
ビキヤツ

快感レッスン

オノメシン

ではまず胸から
ニギマシようつ



ぬぎぎっ



ギューむ

ぐん

ぐん



ちゅぽっ
ちゅぽっ

みちゅっ

ちゅぽっ

ちゅぽっ



ギューむ

ギューむ

うむ

なかなか
感度良好

テロン
テロン



はあ
はあ

ギューむ
ギューむ



では手錠をはずして...



次は口で
してみてください



おおっ...
これはなかなか...

いいですよ!
いいですよ!

びゅん



びびり...
ちびり

チロ
チロ

にゅっ
にゅっ

優秀ですよ
リリースお嬢様

ぬいん

いいですね
パイズリも!



続いて
パイズリを...

にゅっ
にゅっ



ドクッ
ドクッ

びびり
びびり

あ
あ

びびり
びびり



ではちよっと
失礼して...

んむ...

びびり
びびり

あ
あ

びびり
びびり

びびり
びびり



う
う



この分なら
下もいけそう
ですな

あっ…

ちゅん
ちゅん



さすがセム様の
妹君ですな
才能を
感じます

ハア
ハア

ガ
ガ
ガ



ちゅん
ちゅん

ひゅん
ひゅん



セム様を
受け入れる
準備を…

あ
ん…

ちゅん
ちゅん

ひゅん
ひゅん

ちゅん
ちゅん



ではゆくぞ
リリース!

ハア
ハア

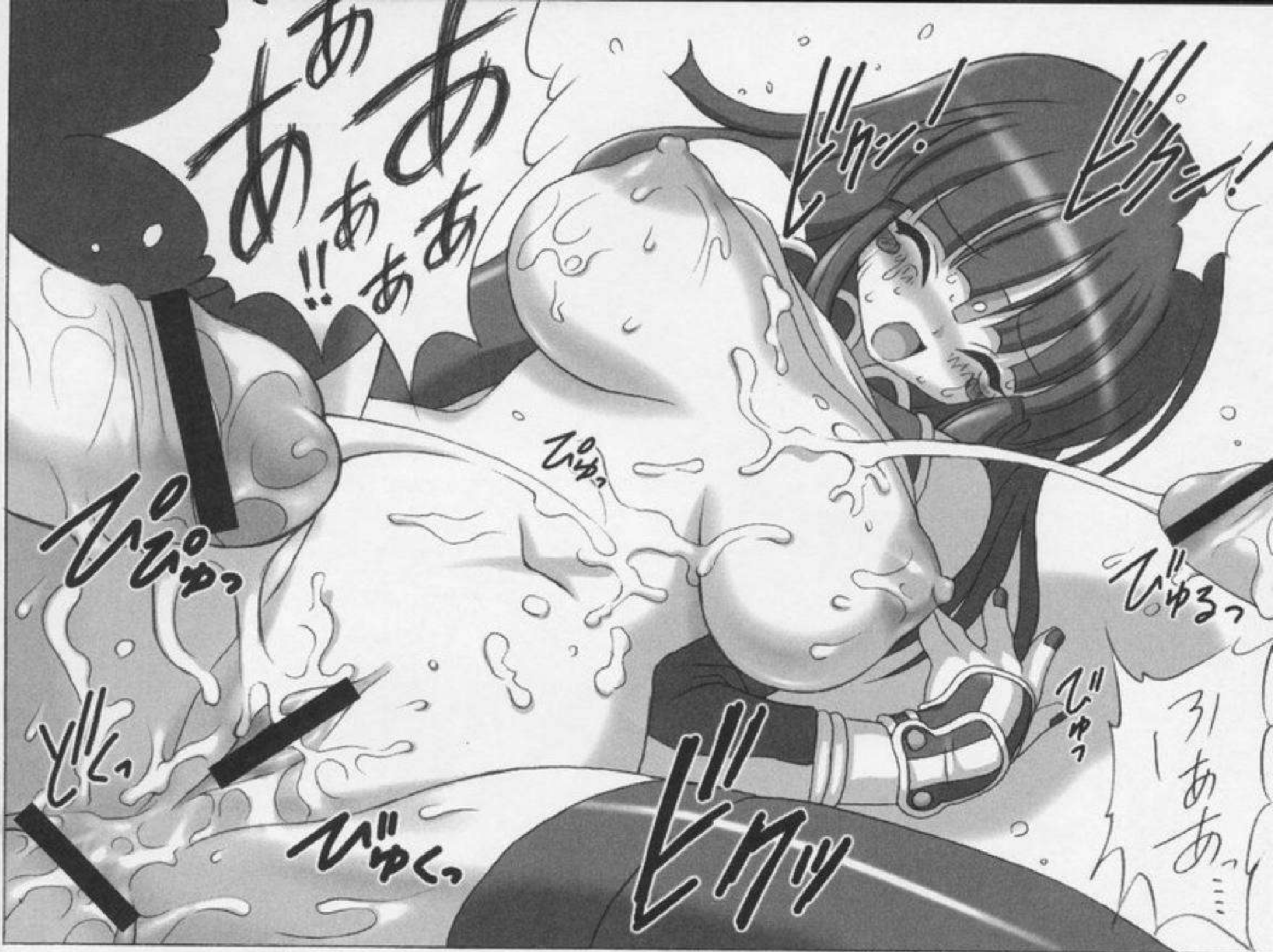
……!

セム

ちゅん
ちゅん









Celica



unknown

wait for
8th style!





士朗っ！

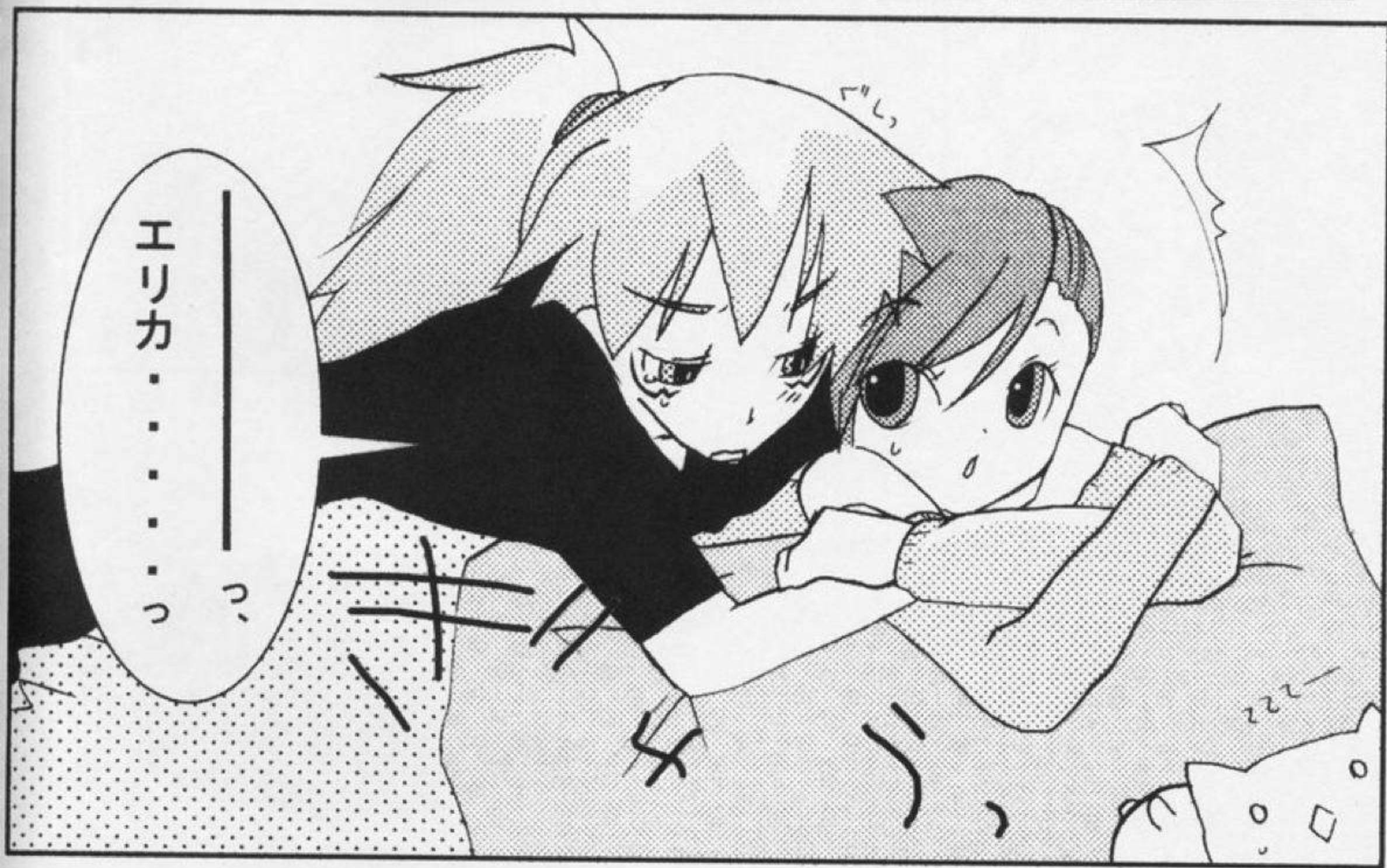
あのね、今日
士朗の家に にゃんこ
見に行っても良い？

……ああ。

……エリカ……♡

しとちゃん

sumy





ちよっちと待ッ、

あ、あ
やだあ……っ

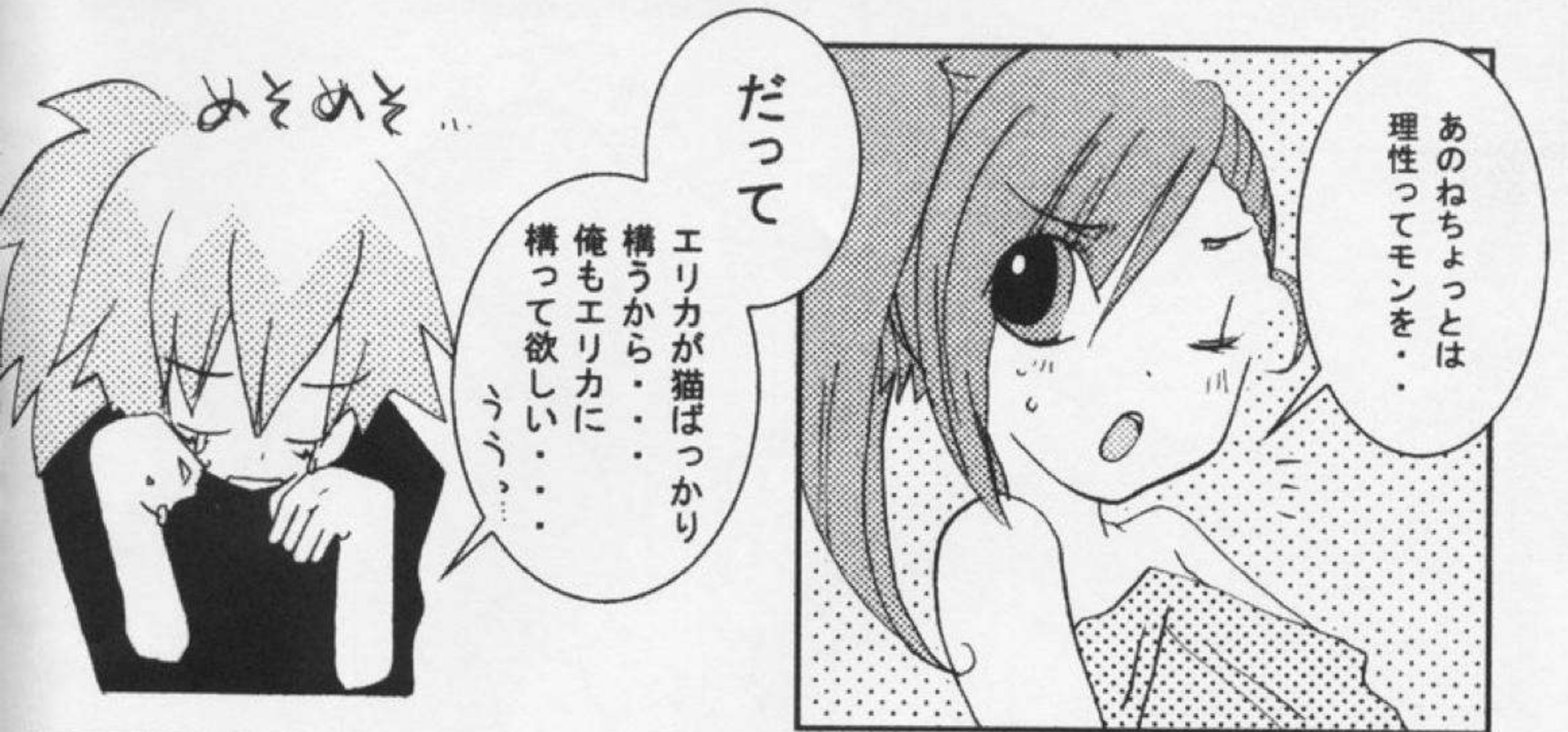


へっ？
ええっ
ちよっ……

ちよっ……っ



士朗っ……—
!!



人はコレを「流される」という。



中途半端に完。



Erika



Nyah

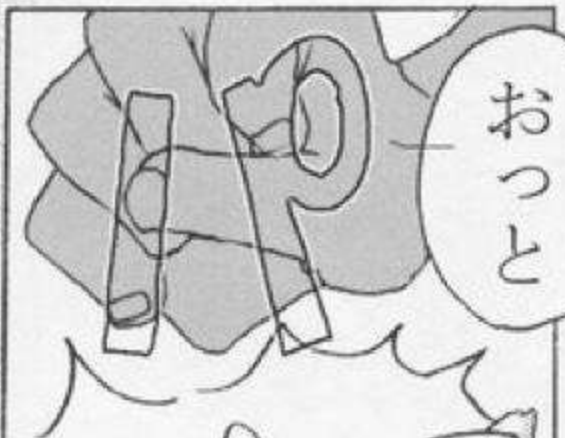


いい加減にしないと
人を呼ぶわよっ
大体っ！何をする
つもりなのっ！

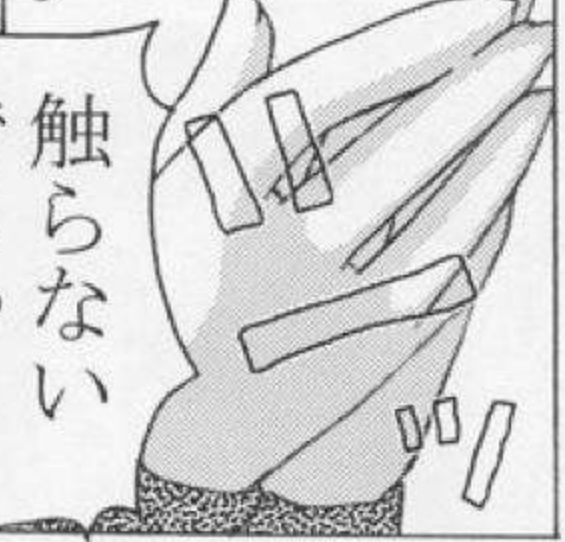


中々威勢が
良いじゃねえか

ぬ
ら
う
っ



おっと



触らない
でよっ

何をするつもり
もなにも・・・



いい
いい

こんな所に連れて
来たらする事は
決まってるじゃん



ほらよっ
まずはたーっぷりと
ご奉仕して貰おう
かな♪

ごっ
ごっ

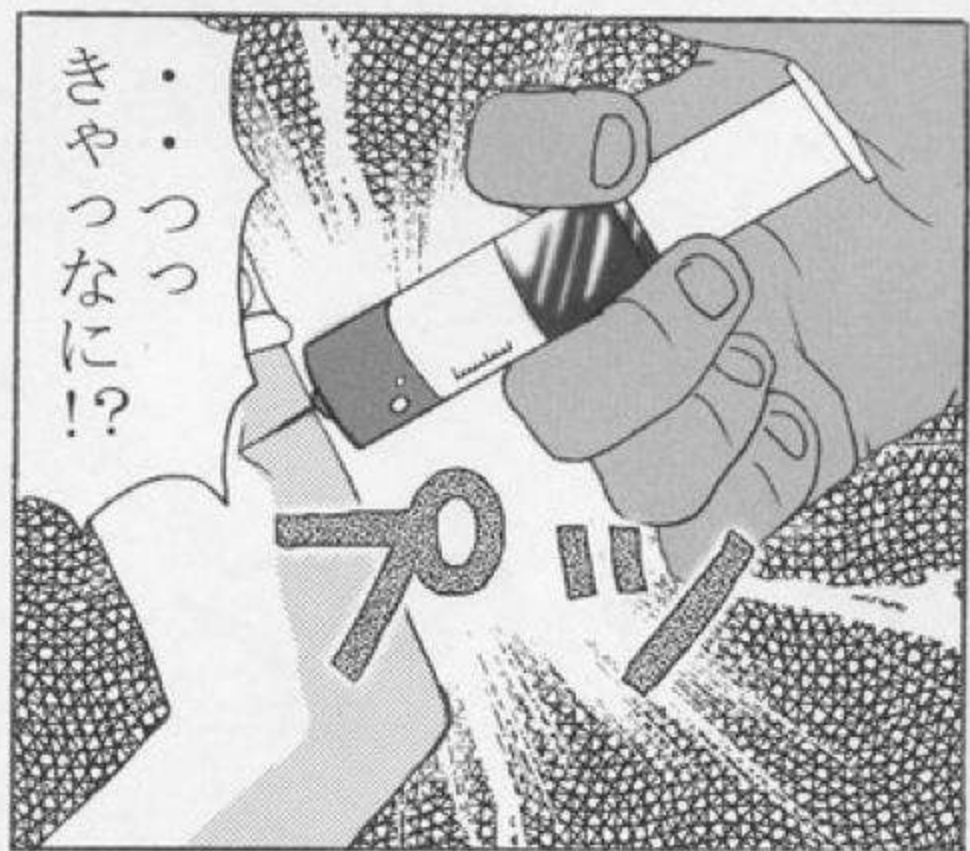
なっ！



そっ
そんな事っ

あ
ゆ
う
っ

出来る訳が
無いじゃ無い！





ふぐっ!
むぐうっ

ううっおっ
でっ射精るっ

ブル



ふあううっ

ぴちや

ぴちや



んむう

ちちびっ

ちちびっ



ドクッドクンッ

ふああ

ピッピチャ

アハッ



ふあ?

あっ
いやあ

脱

んん



じゃあ
そろそろ
本番行くか

ぐいっ

大分薬が
聞いてきたな

トッ

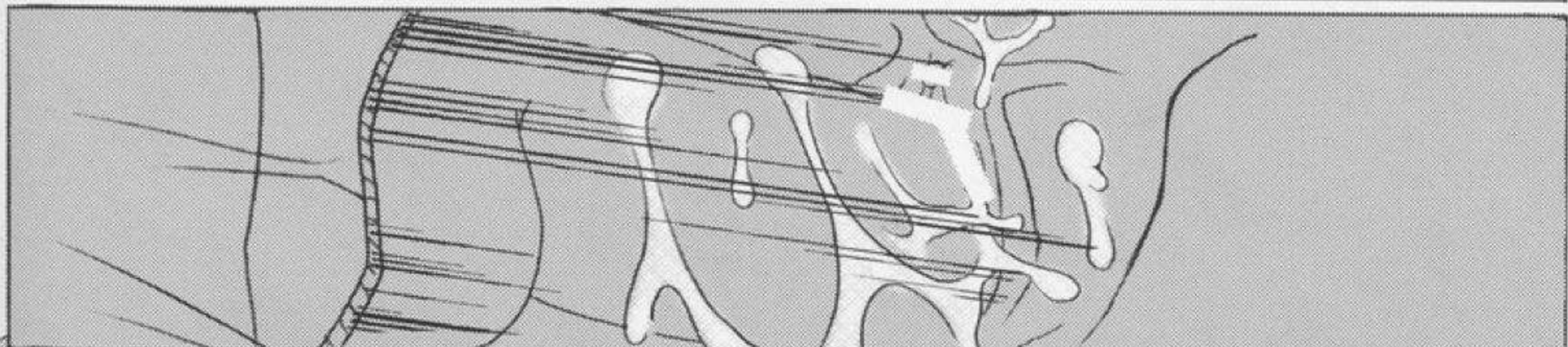




ははっこいつ嫌がってた癖に
ずぶずぶ入っていくぜ。
とんだ淫乱女だなっ(笑)

あっあっふあっ
いやああっ
そんなにつ

激しく
したらっ
壊れちやうっ



むぐっふむう・
あっ・・ほこはっ

触っちやらめ
っ・・はぐっ

さあて
こっちの女は
そろそろ後ろの味を
試してみるかな♪

ぐわんぐわん



うああっひうっ
あっあっあっあああ！



あっあっ！
あっあっ！

ハアハア

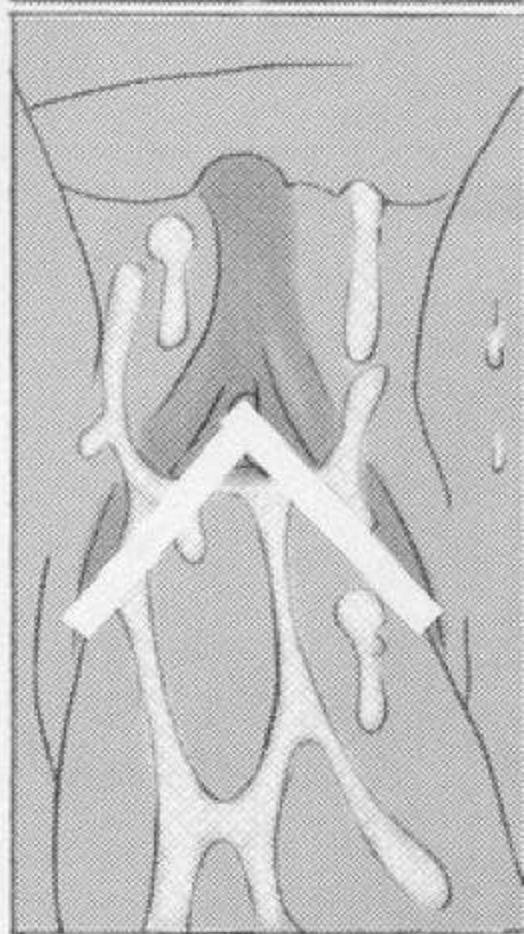
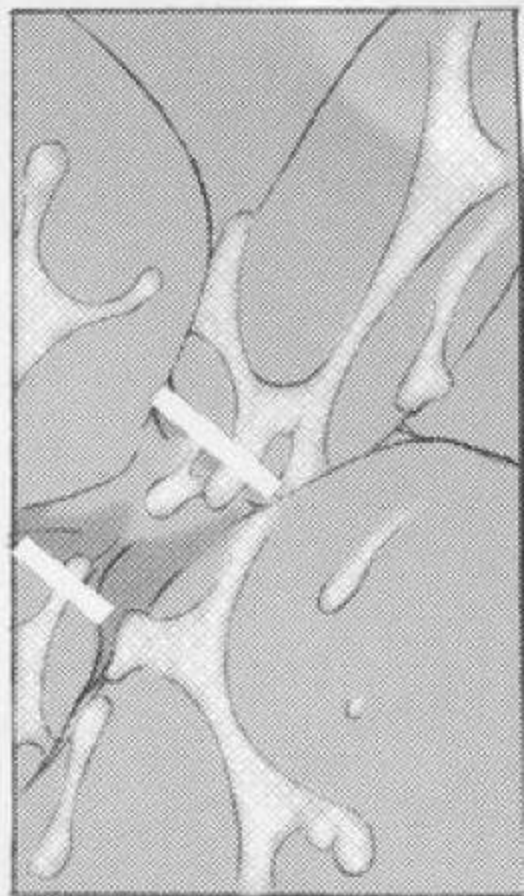
奥がっはうっ
中があっあっ
熱いようっ



あっふあっ
だめえっ

お尻がっああっ
裂けちやううっ

お尻がっああっ
裂けちやううっ





しっかりと
丁寧に舐めろよ

すっかり
大人しくなったな
ははっ

やっぱりペットは
こうでなきゃなあ？

むぐううっ
ふあい

ほらっ
残りカスも
搾り取れよな



END この後 ぐしおしおき決定(笑)

フリーワークらしきもの(マイ)

ほうほうですー。猫(みけ)です。

SEX+MUSICから2冊目の音ゲー本になりますー♪ ドキドキ107107ー 思っ^ての
嬉しいです。今回はかなり無茶なスケジュール
だったのであけれどもがんばってみました(汗)
キツかったけれどもやっぱり本を出す
作業というのは楽しいですわ。

まあこんな事書いてる現在トーン終って
無いんですけど(死)あうう(泣)

今回はニテラオ=11本となりました。
音ゲー自体キャラが多いし何よりポップン
はキャラ数が多いすぎで…(汗)

ほぼ全てのキャラが大好きで選べない
のであきらめました(泣)

ホエとかリゼとかミルとかいっしょ描きた
かったんですけども…あうくやしい(笑)

この本が出る頃にはもう8冊が出てますわ。
どんな曲が増えてるのか
とても楽しみです。

11冊の画面とかも…(邪)

新しいキャラ画面とか見たら
又、CGとか描きたくなるなあー

早くHP更新しないと。あああ(汗)

IDCGとかもっと描きたいです(マイ)

IDマンがは今回いっしょ描いたんで(笑)

しばらくはお腹いっしょかもー。

ニんてうんとがんばりましたので。

まあオメツコの方が100万倍は上手いので
そのマンガを読んでもらって下さい(笑)

2の自分の？ ホキキ止めとかしてけれ
ると…(死) どのどはー

PT
猫





「絶対こっちのほうがいいって」

「何言ってるの？ それってわけわかんないって」

「あなたの言ってることのほうがわかんないわよ」

「何をお」

「やるか」

どっくみあいの喧嘩になった。

と言っても、殴り合いの喧嘩とかではない。

相手を押さえつけて。

「きやはははははは」

くすぐる。

今回はエリカが上になっている。馬乗りだ。マウントポジションと呼ばれる形だ。喧嘩ならここから隠

りつけて勝負は二気に決まる。

だが、ここからやるのは、くすぐり。

わきの下に入れて指を思いっきり動かす。

強制的に笑わされるその感覚に耐えられず、下になったセリカは腕を体にひきつけて左右に転がって逃

れようとする。だが、普段から鍛えられているエリカの指から層層単に逃れることはできなかった。

「あははは、あは、やめてえ」

セリカは目に涙を浮かべながら何とかエリカの手を引き離す。

胸を抱くような形で、脇の下を守った。

ここが外で無くて良かった。

そう思う。

二人ともいつもの格好だ。

上になっているエリカは、汗でシャツが透け、ショートパンツもベルトをしていなかったのですりおち

かけている。

エリカはもっとひどい。シャツはまくれ、胸が出ていたし、下はスカートだったので、すり上がって中

が丸見えだ。くすぐられたこともあって、汗がかなり出ている。艶をあたりに擦り擦らしていた。

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、多少ガードを固めたところで、私の有利は変わらないわ」

わざとらしい笑いで、エリカは勝ち誇る。

「早いところ降参して私の意見を認めたら？」

「卑怯だ」

荒い息を抑えて、それだけ言うのがセリカの精一杯だった。

「何とでもおっしゃい。アルティメットは何でもありなのよ」

そう言っ、左の拳を右の手のひらで包んで指を鳴らす。

このまま、やらねばならぬはいけない。

セリカはそう思う。

このまま主権を握られては、しばらくはエリカの言うとおりのイベントしかできない。何とか反撃し

やるしかない。エリカが油断している今しかない。

セリカ攻撃は最大の防御と言う言葉を思い出した。

「さ、覚悟しなさい」

エリカが手を広げて、今まさにセリカに襲いかかろうとした。その瞬間、エリカは防御をといた。お互いの指が開いてのわき腹を触れる。

力を入れて指を縦横無尽に動かす。

「あははははは」

「きやは、あはは、ちょっと、あきらめ、なさいよ」

二人とも体をのけらせて笑う。それでも、お互い、相手をくすぐることを止めない。ここで引き下が

ったら、相手にどんだくすぐられるか。

くすぐられるのは想像以上に苦しい。特に感覚の鋭い彼女たちにとって、それは拷問以外の何ものでも

ない。頭ではなく体が笑うのだ。快感に一步届かない苦しさで、あまり健全な笑いとはいえないだろう。

特にわきの下やおなかはずらいい。息ができないほど笑ってしまう。

それをお互いに行っているのだ。

「あははははは、いい加減、降参、あは、しなよ」

「そっち、こそ」

二人とも強がっているが、限界であった。

ただ、二人の位置関係が勝負だった。

エリカが上にいる。これは絶対的に有利だ。くすぐりから体をよじって逃げやすい。さらに、相手のセ

リカの体を押さえつけてくすぐりをより効果的にしている。

セリカにはもう後がなかった。逃げることもできないし、このまま降参してしまったら、それこそ延々

とくすぐられてしまう。またもや一か八かの賭けに出るしかなかった。

エリカのシャツを押し上げる二つの突起が見えた。

セリカは迷わなかった。

左手はエリカのわき腹をくすぐったまま、右手を無防備な胸にほとんど殴るように伸ばした。そしてつ

かむ。

「えっ」

手のひらの真ん中に硬い突起を感じて、それをこすり上げた。

「きやう」

効果は想像以上だった。違う種類の強い刺激が全身にいきなり響いたのだ。それに耐えられずに思わず

後ろに逃げた。つまり、エリカの上から降りた。下を向いて肩で息をしている。

エリカも起き上がって息を整えるのに必死だった。

だが、あれだけ有利にくすぐられたにもかかわらず、エリカのほうが回復が早かった。

足を曲して座るエリカは、セリカの後ろ姿を見ている。

セリカはエリカの反対方向に倒れるように座っていた。右足を残すように後ろに伸ばしている。左足を

まげて、その上半身を倒れこませている。両手は無造作にそのあたりにぼろぼろしている。エリカか

ら見ると、お尻をこちらに突き出しているふうにも見える。エリカよりも大きく尻を動かして息を整えよ

うとしていた。

ふと、セリカはエリカの足を見た。汗ばんでいる。付け根。汗？
ちがう。



セリカはそれに気づいた瞬間に動いた。

つぶれるように寝転んでいるエリカの上に覆いかぶさった。

「エリカ、覚悟」

そう言って、倒れこんでいるエリカに抱きつく。抱きついてそのまま後ろに体重をかけ、エリカを無理やり起こした。

「きや、ちよっと」

無理やり起こした次の瞬間には、両手でエリカの胸を思いっきりつかんでいた。やさしく揉んだ。

エリカは声を押し殺すのがやっとだった。体中の力が抜けて、起こしている上半身がその場に崩れそうになった。慌てて両手を伸ばして床につける。力が入らないなりに何とか体をささえることができた。

それが逆にいけなかった。

胸を支えに起きている上半身は、防御するものが何も無い。

シャツの上からでも分かるくらいに大きく硬くなっているものを転がすように、手のひらをゆっくりと動かしていく。

「あ、ためよ、何で、こういう事に、あぁん」

セリカに抗議しようと荒い息で言うが、言葉が途中で快楽に負ける。声が甘い音にしかならない。セリカは、赤く染まってきたエリカの耳に唇を近づけた。

「あら、そんなこと、本当に思ってるの？」

そう言いながら、左手をエリカのおなかの辺りに持っていく。そして、シャツの中に手を入ると、握り上げながら直にエリカの胸を触る。

「ひゃん」

くすぐられたせいで感度が良くなっているのだろう。びっくりするほど、素直で激しい反応をエリカは返してくる。

セリカは調子に乗っていた。

左手の人差し指と中指の間にエリカの敏感な胸の先端を挟むと、軽くこすりつけながら胸を揉む。同時に耳たぶを唇で噛み、舌で舐める。

そして、右手はするりするりと降りて、ショートパンツのジッパーに手を伸ばす。

「だめえ」

声に抵抗する力は微塵もなく、むしろ喜んでるようにすら聞こえる。左手では胸への愛撫を続けながら、器用に右手でジッパーを降ろし、ショートパンツの中に手を差し入れていった。下着の上からではあったが、胸の先端よりも敏感な突起を簡単に探りあてることができた。

「あ、そこは」

座っている上、ショートパンツはエリカの体にびったりだったので、指はそれ以上奥に入らない。セリカは少しだけ考えて、エリカを立たせることにした。そのほうが色々邪魔されずに触れる。

「ほら、立って」

「え？」

「触れないでしょ？」

「触るって？」

「もちろん」

セリカはにんまりと笑うだけで、それ以上言えようとしなかった。

「立って」

もう一度繰り返す。

エリカはその言葉に反応しない。

セリカはエリカのシャツの中に差し入れた右手の、人差し指と親指で軽く硬くなった胸の先端に触れる。

「ううん」

エリカは過剰に反応する。

「感じたんでしょ？」

「違う」

「違うなら、立ってよ」

「何でそうなるのよ」

「あんた」

昔人からは程遠い笑みを顔に浮かべ、セリカはエリカの耳元にささやく。

「逆らえる立場なの？」

耳を軽く噛む。

胸をさする。

足の付け根に指を這わす。

「あひゃん」

派手に艶の含まれた声をあげて、一瞬、体が震えた。

「ね？」

熱い息を耳に吹き込みながら、セリカが笑う。

しぶしぶ、という動作でエリカは立ち上がった。

「じゃ、こっさ」

軽く背中を押すと、よろよろと壁に向かってエリカは歩き出した。

「じゃあ、壁に手をつけて」

エリカはもう抵抗するという顔もないようだ。ふらふらと手を伸ばして両手を壁に寄した。

もう立っているのも辛い。

そんな感じで、体重を手にもかける。

「ふふん」

セリカはその格好に満足して、一気にショートパンツを下着ごと引き下ろした。

「あ」

恥ずかしいところが外気に晒され、不安そうな声を上げた。

仲がいいとはいえず、友人。

明らかにやりすぎだ。

だが、激しくくすぐられたこともあって、少し興奮し、少し意地悪になっていた。

自分も濡れている。

セリカも自覚していた。

この状況に、自分で確かめられないでも分かるくらい濡れていた。普段でもこんなに濡れない。

「足を上げて」

セリカはエリカのすぐ後ろにしゃがむと、エリカの右足に触れて言った。

エリカは一瞬だけ迷った。もう、引き返せないのだろうか。

無理だ。

諷めと、快楽への期待が過ぎって、エリカにはもう言うなりになるしかなかった。エリカが少しだけ右足を上げる。足に引っかけかかっていたショートパンツと下着を軽く引き抜いて左足の足首にまとめた。右足をそのまま外側に押し、足を広げさせる。足の幅が肩幅ほどに広がった。

その後ろにしゃがんでいるセリカには、すべてが良く見えた。

セリカは、エリカの内股に指で触れると、触るが触らないかぎりきりるところをゆっくりと上に向かって這わせていった。

「あ、ああ」

エリカの太ももは、汗と付け根から垂れてくる液体で、いやらしく濡れて光っていた。

垂れてくる液体の元に向かって、セリカの指は這って行く。

「ああ」

あまり濡くない毛の奥のうすい桃色の亀裂に指が触れた。閉じていた亀裂を押すと、簡単にそれは開き、中に溜め込まれていた液体が、先を争うようにエリカの太ももを伝っていく。

セリカはゆっくりと人差し指を差し入れた。

「あ、あ、ゆ、び、あ」

エリカが体を揺るさせながら、その指を受け入れる。

腰から頭まで、しびれるような感覚が突き抜けてくる。

「大洪水ね」

うれしそうにセリカが言う。

「そんな」

「あ、だめ、ああ」

セリカは指で中をかき混ぜた。効果はてきめんだ。セリカの指に腫らされるようにエリカの腰が動いていた。

「何がだめの？」

「いよいよセリカは調子付いていた。それだけではない。自分も興奮してきていた。

短いスカートをはいているのをいいことに、空いている左手で、自分のそこに触れていた。下着の上から、這っている縦一列の線をゆっくりとなぞっていた。

「あ、いいね、すごい」

適当なことをつぶやきながら、右手を熱しく、左手をゆっくりと動かしていく。

「あ、だめ、もう、もう」

その声を聞いて、セリカは自分のスカートの中に入っていた指をエリカのシャツで拭きながら立ち上がった。

「いいわ、いっちゃいなさい」

後ろから左手で抱きしめる。前に回した手は、そのまま胸に手を当てる。

「エリカったら、やらしいんだから」

「そんなあ、でも、でも」

「いいから」

セリカは人差し指だけでなく、中指までもをエリカの中に埋め込んだ。

「ああ、ああ、イク、イク」

指を前後に熱しく動かす。

エリカの足ががくがくと震え、ひざが内側に折れた。そして、

エリカの体が硬直した。

「あ、ああ」

喘息を極限まで甘くした声が、エリカののどの奥から漏れた。

セリカは満足したようにエリカから指を抜いて、体を離した。

ゆっくりとエリカの体が融けて、その場に座り込み、壁に顔を付けて動かなくなった。

「ふふうん」

セリカはエリカから離れると、部屋の反対側の壁にもたれるように座った。セリカも、あまり普通に歩きまわれる状態ではなかった。

この部屋にはテレビとゲームしか置いていなかった。折りたたみのできるテーブルもあるが、今は出してない。ポスターが張ってあるので、殺風景とまではいかないが、女の子らしい部屋ではない。

足を捻げ出すように座ったセリカは、ちらっとエリカのほうを見てから、自分のスカートを捲り上げた。半分近くが湿っている下着が見えた。

「やだ」

火照って赤くなった顔をさらに赤くさせて、セリカは恥ずかしかった。

もう一度、エリカを見る。

エリカは肩で息を替えているだけで、こちらの様子に気づいていない。

「しちゃう」

下着の上から押してみる。そくそくという甘い痺れが、背中を昇ってくる。

我慢できなくなって、セリカは下着の感度を極にすらした。指をゆっくりと入れる。

体の中を流のように快楽がかけあがる。

「ああ」

左手で胸を揉む。

目を瞑って、背中を壁に押し付けた。

頭の中がもやに包まれたようになって、何も考えられなかった。夢中で手を動かす。

一番長い中指を付け根まで入れて、ゆっくりとこねた。

「ふあああん」

もう、とまらなかつた。

体が求めるまま、力いっぱい指を動かす。

「あ、あ、あ」

一気に高まっていく。

腕をとられた。

「え？」

無理やり指を引き抜かれて、セリカは戸惑った。

目を開くと、目の前にいるのはエリカだった。いつのまにか復活していたのだ。

「指じゃ、物足りないでしょ？」

エリカは笑った。その手には、男のものの形をしたおもちゃが握られていた。一応、丁寧にゴムだけか



ぶせてあった。

「じゃあ、お返し」

前戯は必要なかった。十二分に濡れている。

何の躊躇もなく、エリカはセリカの中にそれを突き入れた。

「ひあ、ああああ」

足の指の先まで力が入ってセリカは強く速した。

だが、エリカはそれで許すようなことはしなかった。

おもちやから伸びているコードの先のスイッチを入れる。

低いモーターの駆動音。

男の形をしたそれが、ゆっくりとセリカの中へくねる。

「あああ、ひあん、ああああ」

セリカの中にあるおもちやと真ん中くらいで折れている。角度にして三十度程度。それがセリカの中でゆっくりと向きを変える。

セリカにとっては、そのゆっくりな動きですら、自分の中で暴れているようにしか感じられなかった。

自分の中にある敏感で繊細な官能の線をひっつかかれる。その線は頭の中につながっていて、快感の中核を直接刺激するようだ。

全身が痙攣するほどの快感が何度も何度も駆け上っていく。

「あああああ」

前兆もなく、絶頂を迎えていた。

「あら、また、弱なの」

スイッチのことを言っている、とセリカが気づいた時には、中をかき回す強さが変わっていた。

硬いものが動いていく。敏感な体内の壁がその動くのを阻止しようとするように絡みつく。それは無

駄な抵抗、というよりは、より自分の性感を高めているにすぎない。

低い駆動音に温ざって、水の音が聞こえてくる。

粘り気のある液体の音だ。

それがあふれてくる。

「あはあ、そんな、強く、ためえ」

「それじゃ物足りないでしょ」

セリカの言葉を無視して、エリカはそのおもちやの外に出ている部分を握りなおした。それをゆっくりと出し入れる。

セリカの体が一度丸まって、次の瞬間、びんと伸びた。

見ると、足の指に力が入って丸まっている。本気で感じている。

「感じだしちゃって、いいわ、いかせてあげる」

大きな動きでおもちやを動かした。

「あ、あああ、もう、ほんと、ためえ」

ねじれながら出入りする硬いものの感触にただただ喘ぐしかできなかった。

セリカは自分の体が今までにないほど敏感になっているのを感じていた。全身が性器にひっぱられるように、官能を感じやすくなっている。

「あ、あ、もう、いく、いっちゃうよお」

それを聞いて、エリカはより大きく、より強く、そして、よりいやらしくおもちやを出入りさせた。

「いやらしい娘、いっちゃいなさい」

「ああ、はあん、いくらう」

体を硬直させた。

達したのだ。

「はあはあはあはあ」

さすがに息も苦しそうだったのを見かねてか、エリカはゆっくりと引き抜くと、ティッシュを何枚か重ねて、セリカの体液で濡れたゴムを引き剥がした。そのままゴミ箱に捨てる。いくら興奮しているとはいえ、友人の体液を舐めるような真似はできなかった。

「まったくもう、セリカったら、やらしいんだから」

エリカは持っているおもちやを、先生の持っている差し棒に見立てるようにして、左の手のひらを軽く叩いて音を立てた。ゆっくりしたりスムで歩くのにあわせて叩く。

「自分だって」

セリカは驚い息をそのままに、途切れ途切れに言う。

「そんなん持ってるなんて、よほどエッチじゃん」

的を射た指摘だ。

「これで二回はいいわよね？」

「そんなの」

セリカは一瞬だけエリカの顔を見たが、瞬ち誘った視線を真っ向から受けて、赤くなってうつぶむいた。セリカの目には、少し、涙が浮いていた。

「そんなの入れられたら、誰だってなるわよ」

「そんなことないわよ？」

「なるわよ」

「それはセリカがやらしいからだって」

「じゃあ、エリカは入れられても平気なの？」

「もちろん」

単純に言葉の売り買いだ。勢いだけで言ってしまったのだ。興奮状態だったから、これで感じなければ正しい、という理論がエリカの中でまかり通ってしまったのだ。

「じゃあ、入れて見せて」

エリカは即答できなかった。しかし、話の流れと勢いで、もう断れない状況になっていた。いや、本来なら状況は許しただろう。だが、そんなことを考える余裕はなかった。

「いいわよ」

思わず答えてしまった。

こうして、二人はお互いどちらが実態であるかを、実態プレイによって競う仲になったのだった。

勝負はいつもくだらない(一)

次回、くだらないいつもの勝負、おたのしみに(うそ)



トラン

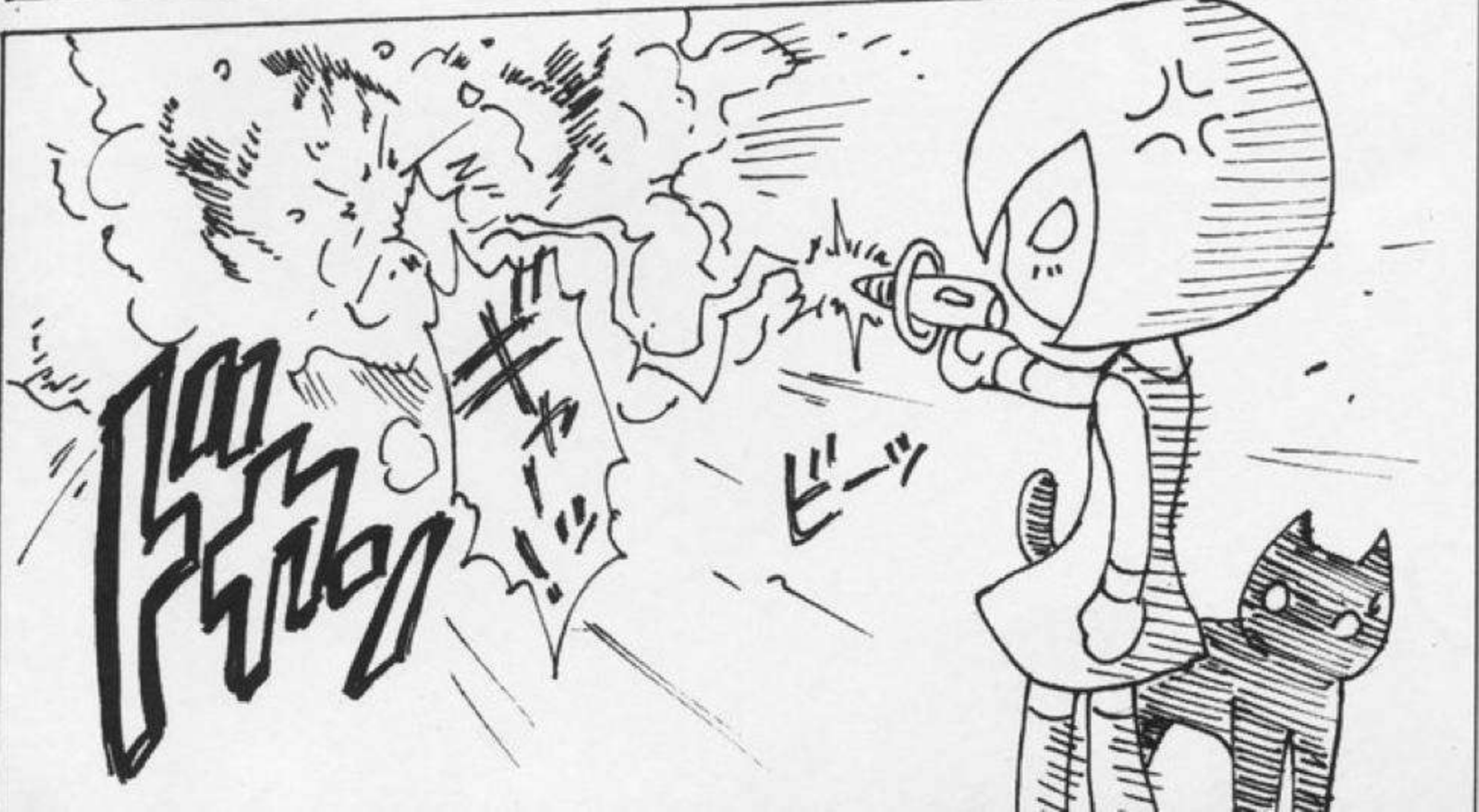
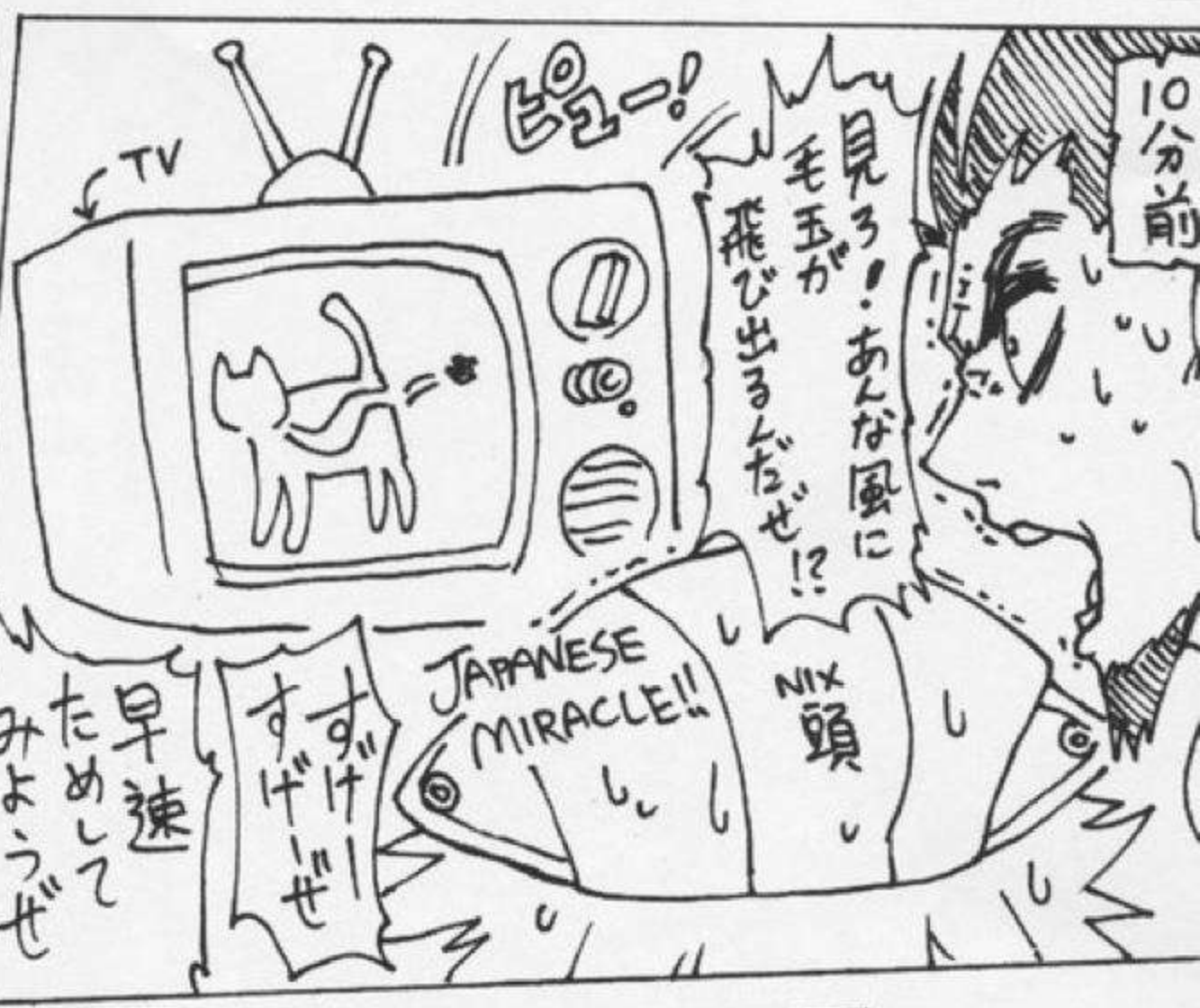


あつがきふゆかいまんが
 ニバカトリオの
 毛玉ケア

ねーこ元〜んえー

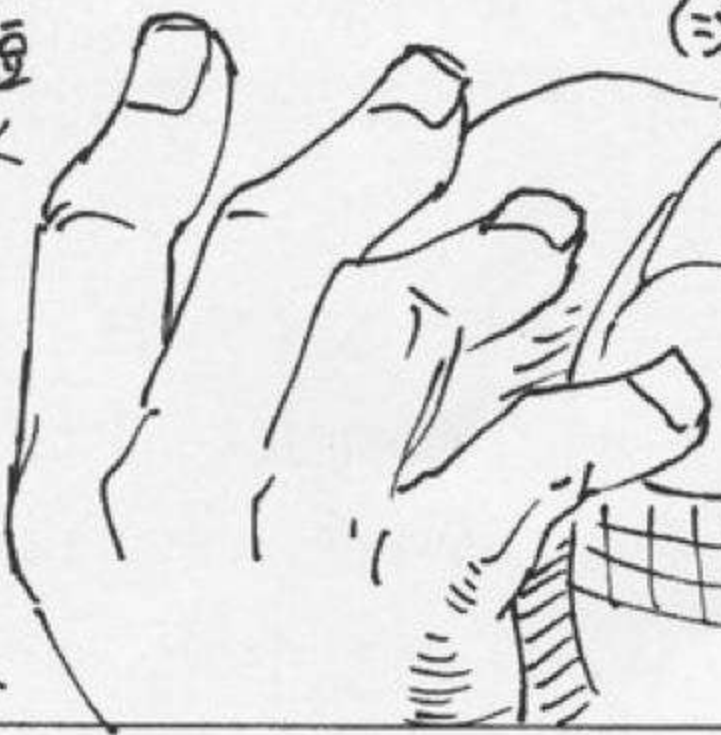


毛玉ケア〜で
 毛玉をはかなん
 たりました





というわけで
ドーマーIIのDMX本
いかがだったでしょうか？

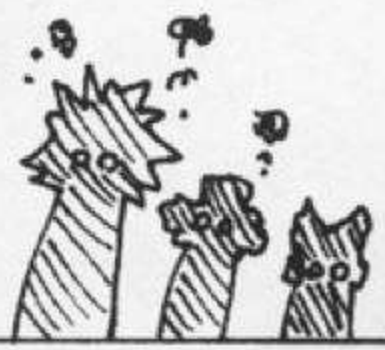


今回はイベントの
当選通知から
しめ切りまでの期間が短く
いつもにも増して大変でした...
忙しい中描いて下さった
ゲストのみなさん
本誌に本当にありがとうございました!!



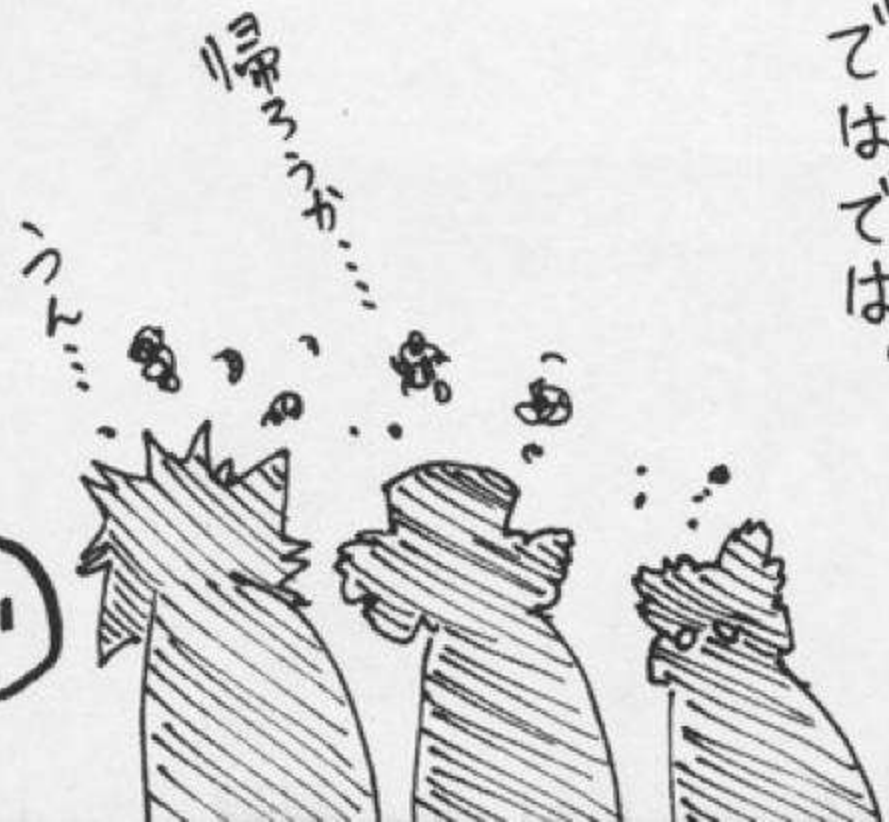
ちなみに今回
入稿日が
ちようど
IIのDMXの
稼働日の翌日だったり
します。

新キャラの
女の子



この本が出る頃には
この新キャラの名前も
広まってるでしょうか。
とりあえず入稿が
終わったら
やりに行って
みようと思います。
ではでは。

END



メンバーコメント

★
猫
(おけ)
★

ほうほうです。猫(おけ)です。
今回は超ホタルでした。(笑)...えはい)
もう後数時間で家出なくちゃいけないのにまた
ケコをやってしまいました(死)
113113本手になりたくてがんばってみたんですけど
またまたまたです(泣)もとかんぱります。
何か今回のマニカは果のティニティニが失敗してて
気に入れません。直したい〜ティニティニ〜!!
... おいませんつかれて脳が変に... (元からです)

★オノメジン★

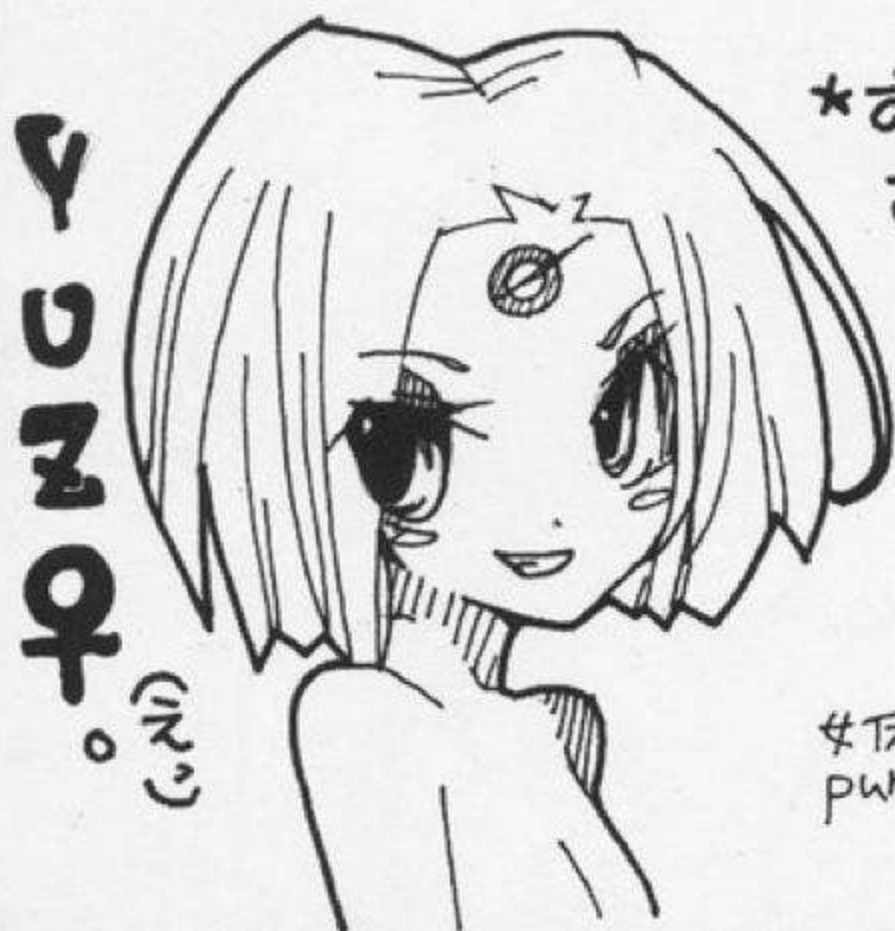
え〜どうも毎回同じようなマンガがすみません(汗)
いかげんもうちょっとまともなモノ描かねばと思うのですが
今回とか本ツツ当に時間無くて
描き方模索するどころか現状維持でいっばいっばいでした。
主線の強弱とかコマ割りとかもう少レガンバラんなあ...

2002.9.28 オノメジン

★ OYZさんまたコメント忘れてるよ! ★
頼むよホント!(TOT)

ゲストコメント

★summy さん★



*および下さり
ありがとう
ございました!!*

私のガンナーは
ちぎって投げ捨てて
下さい...☆

☆本体ゲーム中 @ summy,
pwhisuke@hotmail.com

★七麻皐月 さん★

Q. コンシューマー版に入ってる「合体せよ! ストロングイエーガー!!」
のストロングイエーガーってこんなのですか?

A. それはストロングザボーガーです
スイマセン (^_^;;

今回もお誘い頂きありがとうございました -
相変わらず久々くない絵でスイマセ (汗)
でも楽しかったです -

7thの「Burning Heat!」は
矩形波倶楽部好きにとっては涙ものでした。

2002. Sep
七麻皐月 (tkya3@alles.or.jp)

★ 夕月さんからコメントを
もらい損ねてしまいました スミマセン ★

快感フレーズ KAIKAN PHRASE

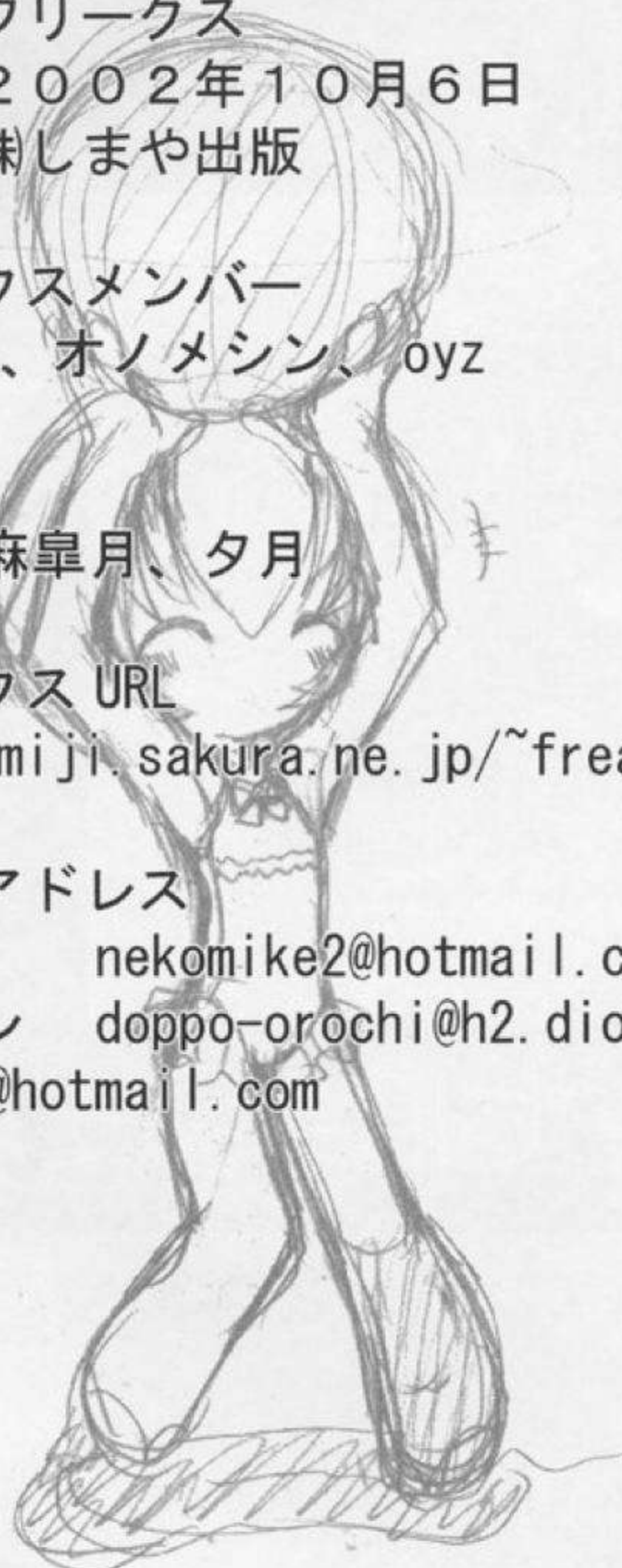
発行元 フリークス
発行日 2002年10月6日
印刷所 (株)しまや出版

♪フリークスメンバー
猫(みけ)、オノメシン、oyz

♪ゲスト
sumy、七麻皐月、夕月

♪フリークス URL
<http://momi.ji.sakura.ne.jp/~freaks/>

♪メールアドレス
猫(みけ) nekomike2@hotmail.com
オノメシン doppo-orochoi@h2.dion.ne.jp
oyz oyz@hotmail.com



本書は18歳未満の方には
ご購入いただけません。
無断転載、複写、複製、
Webへの掲載を禁止します。

for beatmania IIDX fans
adults only
presented by Freaks



快感フレーズ
KAIKAN PHRASE